



牛久市防災アドバイザー

山村武彦

牛久市長

根本洋治

災害に強いまちづくり 助け合う防災活動

日本は世界有数の自然災害大国であり、その日本に住んでいる我々としては、災害に強いまちに住みたいという願望を持っています。

今回、牛久市防災アドバイザー山村武彦氏をお招きし、牛久市長との防災対談を行い、身近なところから災害の発生を防ぎ、また災害にあったとしても、その被害を最小限に食い止め、安心して暮らせる災害に強いまちをつくるにはどうしたらよいか、その思いを語っていただきました。

危機意識について

市長 本日はありがとうございます。今日はあります。私は牛久市消防団で活動していましたが、想定外の範囲を超える災害が発生するなど今までの常識が通用しなくなってきました。今でも火災や地震などの災害発生時には、適切に対応できるのかと不安を感じています。

山村氏 小さな揺れで行動を起こす癖をつけておく必要があります。東日本大震災「3・11」の2日前の3月9日にマグニチュード7.3の地震が三陸で発生しましたが、その地震は、本震に備える防災

訓練開始の合図だったのではないかと思えます。

市長 「天災は忘れた頃にやってくる」といいますが、常に危機意識を持ち続けなければなりません。

山村氏 過去の私の講演会の中でも話をしましたが、「地震は起きると思いますか」と聞くと、たいいていの人には99%「近いうちに地震は起きると思います」という。しかし「今夜か明日起きると思いますか」に手を挙げる人は意外と少なくなってしまう。起きるだろうけれども、ずっと先だと思ってしまう。ずっと先だと思ってしまう人や組織は、実践的な



決断しても実行しないと何の意味もない。
いつかやりましょうではなく、
今やれることをやりましょうということが
大事なんでしょうね。

やま むら たけ ひこ
山村武彦

防災システム研究所所長。

新潟地震(1964年)を契機に、防災・危機管理アドバイザーを志し、同研究所を設立。世界中で発生する災害の現地調査、研究(250カ所以上)を実施。日本各地での講演(2,200回以上)、報道対応、執筆活動を通じた防災意識啓発に取り組む傍ら、企業や自治体の防災・危機管理アドバイザー(顧問)として、災害に強い企業・街づくりに活躍中。実践的な防災・危機管理対策の第一人者。

訓練や準備はできない。いつでもどこでも災害が起きるといふ認識を持たなければならぬ。

災害の教訓と

即応性ある備え

市長 学校においては、学校が被災する、危険な状況が発生するかもしれない。その際の現場の対応力が必要になると考えます。先生たちもやっぱり訓練が必要なのかなと感じています。

山村氏 先生方が自分の身を守ることはできなければ、生徒を守ることができません。命を守ることを優先するために何をやるべきか。また、教室にいるときだけ地震が起きるとは限らない。街中を歩いている時の落下物対応はどうするか、車が暴走する可能性もある。そういった展開予測を先生方に教えて、子どもたちにきちっとした対応や行動の仕方を伝えておかな

ければならないでしょうね。
市長 そうですね、車も暴走するということが起こりうるということをお話しておかなければならない。

山村氏 私がアドバイザーしている地域では、子どもたち同士が勉強会を開いて自分たちの通学路の安全チェックをしながら、危険を見つけたらどうするかを考えたり、自分たちの防災ブックを作っている学校もあるんです。そういったことも参考になさるといいですね。

市長 市では昨年、夜間の防災訓練を行いました。その際私も、行政区の区民とともに避難経路を歩きました。公民館に集まり、経路上約2m幅の真つ暗な道があり、塀が倒れてきたら危険な道でした。違う道を選ぶ選択肢が必要だと認識できました。そこに訓練をやる意味があるのでしょうか。
山村氏 市長が市民と行った夜間の防災訓練は、素晴らしいと思います。訓練で

あれ災害時と同様の状況を体験することで得られる気付きは大切です。実際、糸魚川の大火の現場に行ったとき、毎秒27mの強風の中で17人の負傷者の多くが目を負傷されました。強風ですから水平に火の粉が飛んできます。消防署員の方はヘルメットにシールド(透明なプラスチック樹脂)が付いているが、消防団はヘルメットのみ。だから、水平に飛んできた火の粉で目を負傷している。市長さんに前回お会いしたときにこの話をしたら、すぐにシールドかゴーグルを付けたいと話をされましたね。

市長 早速、消防団に取り付けさせるようにしました。
山村氏 素早いんですね。危機管理でいえば、実行と決断なんです。決断しても実行しないと何の意味もない。いつかやりましょうではなく、今やれることをやりましょうということが大事なんでしょうね。

災害に強いまちづくり 「互近助さん」活動

市長 まずは、身近なことからやっていくのも、1つの方法だと思います。また牛久市内においても、駅に近いとか、マンションとか、団地とか、地域の特性があつて、避難のしかたにおいても違いがあります。

山村氏 そうですね、地域の特性に合わせた、訓練や対策・準備が大事だと思っています。やはり、市が主導しながら、地域の人たちが主役になって防災対策を進めていく必要があります。私が提唱しているのが、「互近助さん[※]」です。互いに近くで助け合うというのは、何か起こったときに、消防・警察・自衛隊がすぐに助けに行けるわけではないから、発災直後は隣り近所の助け合いが重要です。防災は自助共助・公助と言われていて、もちろんみな大事ですが、近くで助け合うというのが一

牛久市における防災の取り組み

自主防災組織

地域住民による自発的な防災活動を行う組織として多くの行政区で組織化されている。それぞれの地域の特性に応じた防災訓練や、防災資機材の活用、備蓄、意見交換会などを行っている。



牛久市防災訓練

平成28年11月の防災訓練では、夜間における防災訓練を実施。発災時に身を守るための初動訓練、夜間の住民避難、避難所生活、ペットの対応などの訓練を行った。



牛久市消防団 市役所消防隊の発足

平成28年4月、牛久市消防団において市役所消防隊を新設。市職員が出動することで、課題となっている平日昼間の消防力の向上を図っている。



学校と地域で連携した防災教室

平成29年6月、牛久小学校では、4年生が牛久小地区社協とPTAサポーターと一緒に「ぼうさい探検隊」を実施。実際に学区内を歩き危険箇所を確認し、防災マップにまとめた。



中学生を地域の防災の担い手として育成

平成28年12月、神谷行政区では区内在住の牛久一中1年生に防災訓練を実施。今後「牛久一中地域コミュニティ協力隊」として地域における防災の担い手となることが期待されている。



災害協定

市では防災体制を充実するため、民間企業等との防災協定の締結を推進している。



番大事。昔から遠くの親戚よりも近くの他人といいますが、それほど大事な人でも、離れていけば助けられない。発災し生き埋めになった場合、近くの人しか対応できません。牛久市の行政区の自主防災組織では、隣り近所で助け合う仕組みを作っています。

市長 防災訓練を活性化させ、地域の結びつきを深める例として、ある行政区の

防災訓練では、会場で野菜を即売していました。

山村氏 そうですね、あれはビックリしましたね。訓練のたびに近くの農家と提携をして、採れたて野菜を山積みにして即売会をすることで、大勢の人が集まってくる。ちょっとしたアイデアで活性化ができるんだと思います。

市長 私も、行政区・社会福祉協議会・地区社協等とともに、近所の助け合いの精

神を広めていこうと考えています。さらに市町村間の連携として、稲敷地方広域市町村圏事務組合を組織する近隣市町村相互で、水害が発生した場合、被災していない市町村が支援するなどの連携を図り、減災に繋がっています。

牛久市の防災上における今後の課題と対策

市長 今、牛久市の課題の一つに防災行政無線があり

ます。今の防災無線をそのままデジタルに変えた場合、多額の経費がかかります。また、防災無線の音が聞こえない、逆にうるさいなどの苦情があり、防災無線の有効性が問われています。より有効な方法はないものでしょうか。

山村氏 代替措置はあると思っています。一般的に全体情報としてはテレビがあるのですが、発災時停電になればテレビは使えませんが



ら、その時の情報源とし防災ラジオや防災無線の戸別受信装置を設置するなどの方法があります。併せて、コミュニティFM^{※2}、ホームページ、かつばメール^{※3}、エリアメールなど、複数の情報伝達手段を用意しておいて、その中で自分に都合の良いものを選んで情報を得ていただくことも一つの方法ではないかと思えますね。

市長 市ではかつばメールの登録を促進し、災害情報などを配信していますが、登録件数は約2万6000件あり、この媒体(かつばメール)による情報は、効果的ではないかと思えます。

山村氏 結局は人なのでしょね、牛久の人は、よく話しかけてくるし、人懐っこいですね。さらに牛久というまちは稀勢の里関で世界中か

市長 そうですね。お互いに声を掛け、話し合える仕組みや、普段からの付き合いを醸成していくことが一番の理想ですね。

牛久市の魅力と人與人との繋がり

山村氏 ただ、スマートフォン、携帯電話やインターネットなどは、あまり慣れていない方がいます。そういう方々にはどうするか。私は互いに助け合う「互近助」——となり近所で情報を持つている人が、情報を持つていない人に伝える・連絡するという普段からの付き合い——が大切だと考えています。

市長 もともと牛久は人情味にあふれ、昔から祭りがあり、近所付き合いがあるまちです。何かあったときは、お互い面倒をみてやったりするまちなのです。

山村氏 これからは住みたいまちというよりも、ずっと住み続けたいまち、ということがいいのではないかと思います。

市長 この地はもともと防災上しつかりしたまちなのです。この点に注視して、アピールしていけば、牛久市に移り住む人が増えていき、牛久のまちも活性化していくのではないのでしょうか。

山村氏 ダメージを受けたときに精神的にもそうなんですけれど、安全・安心まちづくりとは、結果として人づくりなのではないでしょうか。牛久市は、食べ物がおいしいし、人も豊かだし、それも含めて牛久市のいいところの一つに安全・安心ということも、1つの売りになっていければいいと思えますね。



※1 互近助さん
「互近助さん」の取り組みを分かりやすく歌にした、山村アドバイザー作詞「互近助さんの歌」。牛久コミュニティFMの番組「うしくうれしく放送」で放送中です。ぜひ聴いてください。



※2 コミュニティFM
平成27年8月、牛久市保健センター内に開局したFMラジオ「牛久コミュニティ放送」では、災害時に市と放送局が連携し、割込放送を行うなど、リアルタイムに災害情報を発信している。



※3 かつばメール
牛久市メールマガジン「かつばメール」に登録し、「地震震度情報」「火災・災害情報」の項目をお選びください。



市長 牛久は、ぜひそういうまちにしていきたいと思えます。本日は、どうもありがとうございました。

【問い合わせ】 広報政策課 ☎内線3221